

外語大の一つの意味

国際関係論・助教授 中嶋嶺雄

現段階において、諸君にその自覚はないかもしれないが、諸君の大部分は、やがて本学を卒業してまもなく、それぞれの分野で国際的接触の第一線に立つ宿命にある。そのような諸君の個々の国際的接触そのものが、日本の対外的イメージを形成し、対日評価をもたらす要素になるのだから、そのこと自体が一つの“日本外交”なのであり、外交とはなにも政治家や職業外交官だけのものではないのである。このように考えたとき、本学に入学した諸君の任務は大きく、責任は重い。そうした自覚に基づいて、外語大生としての誇りを忘れずに、大きく胸を張って進んでいってほしい。

本学は、外国語研究の総合大学であるが、同時に地域研究や国際関係論を修めることのできる外国語の総合大学であるべきであり、私たち教官もそのような方向性を求めて模索している。従って、諸君は、外国語を十分に身につけたうえで、それぞれの地域研究や国際関係論のスペシャリストになり得るといふ点で、ある意味では他大学ではなし得ないもっとも有利な勉強環境にあるといえるのであり、それだけに他大学の学生よりも厳しく負担の多い勉強を要求されるのである。これは喜ぶべき“特権”ではなからうか。この“特権”を十分に活かし得るか、それによって押しつぶされてしまうかは、ひとえに諸君の主体性にかかっている。

ところで、私の専門に即して少しく述べるなら、国際関係論(International Relations)という学問分野は、最近、一寸した流行にもなっているか見えるが、それをどうとらえ、位置づけてゆくべきか、いまだ試行錯誤の段階にあるともいえる新しい学問分野である。それだけに、安易な到達点を求め得るものではないのだが、幸にして、本年度から国際関係論の講座が正式な予算措



置を伴って設置されることになった。

国際関係論は、きわめて間口の広い学問分野であり、それは国際間の①政治接触、●経済接触、③文化接触を包括的に研究することが要請される

と同時に、国際政治学、国際経済学、国際コミュニケーション論、文化人類学、世界史、思想史などの学問分野をリンクした interdisciplinary な学問領域をカバーし得る方法論を必要とする。しかも、各研究者は、国際関係論の礎石となるべき地域研究学(Area Studies)を身につけたうえで、①資料研究(Text Critique)、②情報検索(Data and Information Survey)、③現地実態調査(Field Work)の有機的な総合による肉づけをおこなわなければならない、さもなければ、折角の学問も空理空論におわってしまう。このように考えたとき、国際的共通語としての英語はもとより、各専攻地域の語学に堪能であることは、当然の必要条件になる。私が、本学は他大学ではなし得ないもっとも有利な勉強環境にあるといったのは、まさにこのような意味においてであり、生易しいものではないがそれだけにやりがいがあるといえるのである。諸君の努力に期待するゆえである。

最後に一言。よく新入生にたいしては、「受験勉強から解放されて」とか、「無味乾燥な受験勉強とちがった学問を」といふことが、いわれる。たしかに今日の受験体制下における勉強は学問の本質から大きくかけはなれた側面がないではない。だが、私はいささか異なった意見をもっている。諸君が多感な青春期を賭けて日夜励んできた受験勉強の成果は、やはりそれなりに貴重なものであり、その成果を全面的に放棄するのではなく、今後の学問の場に接続させ、活用することこそ必要なのであり、また、そうしてこそはじめて受験勉強

が意味あるものに転化され得るのではなからうか。私自身のささやかな体験を述べるなら、受験時代に、赤や青のアンダーラインや書きこみで汚れつくされた一冊の世界史の参考書は、大学生活においても基本的史実の理解に役立ったし、大学院の受験に際してもそのまま利用することができた。今日でもしばしばページをくっては、甘酸っぱい青春期の追憶とともに役立てることがある。もとより、一冊の参考書だけで学問が可能であるはずはなく、それに数十倍、数百倍する読書が伴うべきであるが、その一冊の参考書は、こうしてはじめて受験のためのみの怪桎から解放されたのであった。その意味でも諸君はいま、もっとも有利な地点に立っているといえるのではなからうか。

悔いなき青春を

経済学教授 山田克己

新入生諸君、合格おめでとうございます。長い間の苦しい受験勉強の後だけに、その喜びは格別のことと思います。そしてまた大学生活への期待も大きいことでしょう。

ところで、例年新学期が始まると大学に対して失望をもらし始める諸君が少なくないように思われます。それは、ひとつにはこれまでの学校生活とちがひ、大学では講義の内容が急に難しくなり、しかも一方的に講義が進められてゆき、諸君との間の交流がない、といったようなことが原因のようです。私にも経験がありますが、講義題目をみると面白そうなのに、教室に出てみると学生の方をろくに見もせず、ただノートや教科書を読み上げるだけという講義が多く、がっかりしたことを思い出します。もちろん、本学ではそれ程のことではないと思いますが、そのような場合でも、つまらないとか難しいとかいうのは講義をきく側の態度に問題がある場合が少なくありません。どんな名講義であっても、何も準備なしに出席し、漫然とノートするだけであれば面白くなるはずはあり

ません。授業の前に、指定された教科書、参考書はもちろん、それらに引用されている文献にまで当たってみる位の準備があつてはじめて講義も面白く理解できるようになるのです。

とはいっても、すべての学科についてこのような準備をすることは不可能でしょうから、そこに学科の選択が行われるのは自然でしょう。ただ、あまり早い時期に十分な検討もなしに学科の選択を決めてしまわないよう望みたいと思います。

次に、長い間の無味乾燥な受験勉強から解放されて、新しい大学生活に対する期待にみちているこの時期に、しばらく自らの内面をふり返ってみることも必要であろうと思います。一体諸君はこの大学に何のために入ってきたのでしょうか。ただがむしゃらに勉強して良い成績をとり、一流の会社に就職すれば満足なのでしょうか。おそらくそうではないと思います。大学に入学できてほつとした今、自分が何のために何を求めて学ぶべきかをふと立ち止って考える諸君も多いと思います。その時、これから諸君が手にする社会科学書や思想書がその手がかりを与えてくれることでしょう。それらの書物ととり組み、先人がどのように社会を把え、どのように生きたか、を辿ることによって、今日の混乱した社会に強く生きる勇気と方法を身につけることができるのではないのでしょうか。そして、そうした主体的な問題意識との関わりにおいて、はじめて講義にも興味を湧いてくるでしょう。いろいろな制度的制約や不備のあることを承知の上で、諸君の折角の努力を望んでやみません。

以上、いかにも固苦しいことばかり述べてきましたが、大学生活はもちろん勉強だけがすべてではありません。これからクラスやゼミの歓迎コンパもさかんになるでしょうし、部やサークルに所属し課外活動に打ち込む諸君も出てくることでしょう。そうした機会に良き友を見つけ、生涯にわたる交友関係を築くことも大切です。一度しかない大切な青春を悔なく生きるよう望んで筆を擱くことにしましょう。

東外大ニュース

No. 18

昭和50年4月15日 東京外国語大学広報委員会

目 次

新入生諸君を迎えて	学 長	坂 本 是 忠	2	インド・パキスタン語学科	助教授	鈴 木 濱	15
過去から未来へ	前学長	鐘ヶ江 信 光	3	(ウルドゥ)			
新入生諸君に望む	学生部長	鈴木 幸 寿	4	インドネシア語学科	教 授	沢 元 剛	15
もっと図書館へ	図書館長	松 山 納	5	インドシナ語学科	教 授	中 島 慰	16
英米語学科	教 授	志 村 正 雄	6	アラビア語学科	助 手	藤 田 進	17
フランス語学科	助教授	岩 崎 力	8	特設日本語学科	教 授	国 松 昭	18
イタリア語学科	教 授	秋 山 余 思	8	国際関係論	助教授	中 嶋 領 雄	20
ドイツ語学科	助教授	松 井 利 夫	9	経 済 学	教 授	山 田 克 己	21
ロシア語学科	助教授	新 田 実	10	保健体育	教 授	中 島 光 広	22
スペイン語学科	助教授	野 間 一 正	11	新任教官紹介			23
ポルトガル・ブラジル語学科	教 授	浜 口 乃 二 雄	11	学生部から			23
中国語学科	助 手	依 藤 醇	12	図書館だより			25
モンゴル語学科	助 手	蓮 見 治 雄	13	L.L.より			26
インド・パキスタン語学科 (ヒンディー)	教 授	土 井 久 弥	13				

題字：鈴木幸寿学生部長

